

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒190-0013  
東京都立川市富士見町2-12-13 安藤ビルB1F  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up, TOHOKU!

2014年(平成26年)1月16日 木曜日

無料

## 第20号

毎月発行

創刊2014年(平成26年)1月16日 木曜日

**【東北を世界にアピールするプロジェクト】**  
を立ち上げ、東北を活性化し、復興し、再興させよう  
政府・行政が消極的、被災地がバラバラ等、復興が進展しない理由を並べ立てるだけではどんどん悪化の一途を辿る被災地の状況、この流れを反転させるため、逆転の発想の民間プロジェクトを立ち上げよう!

### 東北復興ビジョン 論議はどこへ 行つたのか

行政の硬直的な対応や復興予算不足・予算流用、被災地がひとつにまとまらないことなどで東北被災地復興がなかなか進まないという話は飽きるほどに耳にしていたが、そもそも「復興ビジョン」に関する議論はどこへ行つてしまったのだろうか?  
復興は数年の事業ではないことは百も承知であり、超長期事業であり、そのためのビジョンが必要なのは言うまでもない。ビジョンという海図なしに復興事業

業という巨大な船はどこを目指そうというのか?  
しかし、すぐにも「目の復興作業」も遅れているのに、原則論としての「復興ビジョン」を議論しても始まらないという声が聞こえてきそうである。

### 夢を持ってない 復興事業など ありえない

誤解を恐れずに言うならば、震災前からの諸課題だけにとらわれている復興事業は、たとえすべてが順調に進行したとしても、東北の被災者はじめ東北住民に幸福をもたらすものとはいえない。せいぜい、周回遅れ、あるいは二周、三周遅れで「旧に復す」にすぎず、何年先か分からないが、事業終了時には関係者を大いに落胆させるであろう。「これだけのためにいままで苦労してきたのか」。

復興ビジョンに夢が必要だというのは、時代を先取りし、復興事業終了時点でも時代の先端を走っているような計画のことである。それは単なる夢想ではなく、大胆な計画を包含した実現可能なビジョンでもあり得る。  
しかし、現況を突き抜けたような発想を見聞きすることは少ない。  
それが打ち建てられれば、自然に人が集まり、事業が活性化していくものだ。一見して「回り道」に見えるが最終的には最善の

### 近道になるにちがいない。 夢はどこから 引き出すか 先人たちに学ぶ

そんなアイデアはどこにあるのかと問われそうだが、思い切つて、東北の先人たちの足跡を見習うべしと答えようと思う。  
先人といつても、昭和や明治時代ではない。江戸時代だけでなく、もつと遙かな昔、奈良・平安時代、弥生・縄文の古代の先人たちである。  
過去を忘れ、進歩したと思いがつた現代の東北人は、過去に学ぶことなど何もないというかもしれないし、古代東北人を遠い過去の人で、原始の人であり、現代とは無関係と見なすかもしれない。

しかし少し古代史を勉強すれば、それがとんでもない誤解であり、むしろ先人たちの業績を見直し、さらに掘り起こし、自分たちの発想が貧困化していることを反省すべきだと思う。  
現代の東北人の思い違ひの原因はいろいろあるだろうが、ひとつには、東北古代史が未発掘のまま放置されていることもある。あるいは時の権力者が東北の歴史を改ざんしたこともあるだろう。  
しかし何より、幼少時から教えられた改ざん東北古代史に疑いも持たずに、そのまま受け入れているから

### 歴史掘り起こしの時

東北古代の歴史に関する事柄に関しては文字情報が極端に少ない。とはいえずにさまざまな形で残された遺跡、遺物、地名、伝統芸能などに託された記憶、言い伝えなどから、過去の歴史を鮮やかに蘇らせることは可能だ。  
さらに近年の考古学の発見、歴史とは一見無関係に見える古代の気象学、植物学などの成果で、従来の歴史観が大きく変貌を遂げていることも確かである。  
また大学の研究者だけでなく、市井の研究者の研究成果に見るべきものも増えてきている現実がある。彼らの提示する研究は、従来の手あかのついた古びた歴史を覆すケースもたびたびである。東北の古代史も例外ではない。

### 古代からグローバルな 視点を持つ東北

東北の戦国武将・伊達正宗が「世界」を見ていたことはほとんどの人が知っている。サン・ファン・パウティスタ号で遣欧使節として支倉常長をヨーロッパに派遣したことがそれである。しかし、戦国時代は終りを告げ、あだ花となつてしまった。今となつては正宗が夢見た世界との関わりがどんなものかを想像するのはむずかしい。  
それ以前にも世界を見て

いた東北のリーダーはいた。平泉の奥州藤原氏が、実は北方や中国などの海外交易で富を築いたことはあまり知られていない。  
いやもつと昔から、東北にはグローバルな交易が存在した。アテルイもそうである。さらに縄文時代の東北もそうであったらしい。何千年にも亘り、東北は北方交易の拠点であったのだ。

### 東京経由の発想を 切り離し、 いきなり世界へ

かつて江戸や京都、大和朝廷経由ではない海外交易が東北にはあった。それを踏襲すればよいのだ。つまりは、東京経由で世界に打つて出るのではなく、いきなり世界に向けてさまざまなプロジェクトを発信すればよい。  
時代が下り、明治、昭和になり、平成になつてから、あまりにも萎縮した思考回路に染まつてしまったといえないだろうか。

### 戊辰戦争敗戦以降の 自虐的図式を捨てる

萎縮した思考回路といえ、戊辰戦争以降現代まで続く、敗者意識、被害者意識、中央へのひがみ、自虐的な東北像を後生大事に温存していることを東北人は

ほとんど意識していないが、まちがいはなくそれに縛られていると思う。  
この図式のなかで発想する限りは、東北の復興が成功する可能性は小さいし、活性化も、ましてや東北再興などおぼつかないと言わなければならない。したがつてこの図式を早々に打破すべきである。

### お金より人を集める

昨年、東北復興予算に関する話題でにぎわつた。予算の流用であり、予算の未消化問題などである。  
しかし、東北の復興にとつて最も大事なことは、お金よりも何よりも、全国から、あるいは世界から人材が集まることである。  
その集まつた人材から、積極的に、多くの知恵と工夫とアイデアを借りることである。間違つても、外部の人間に東北のことが分かるはずはないと、はなから拒絶してはいけない。  
それと、外部の人材に、東北人が気づいていない東北の魅力を発掘してもらうことである。未発掘の東北文化、東北のアート、東北の食文化、東北の観光など、東北は資源の宝庫である。これを発掘し、育て、事業化して東北の復興、活性化、再興へとつなげることがいま求められていると痛切に感じる。当新聞も、この考え方を現実化すべく、下記のようなプロジェクト設置に尽力したいと考えている。

### どんなプロジェクトを企画するのか

- プロジェクト企画の大前提として、戊辰戦争敗戦以降現代までも引きずる敗者の意識、中央へのひがみ、被害者意識と自虐的東北像を捨てる
- 東京を経由して世界を目指す二段階方式ではなく、いきなり世界へ挑戦するプロジェクト
- 東北人自身によるテーマ掘り起しではなく、外部の人間に、外部の眼で魅力を発見してもらう
- 従来の東京発・日本発の手法とは異なつた方法、東北発のオリジナル手法で事業化する
- プロジェクトの分野候補は、未発掘の東北文化、東北アート、東北の食文化、東北の観光など

### どんな方法で実現していくのか

- 大量資金が必要な巨大なインフラ事業などを狙わず、夢のある事業で、かつ出来るところから開始する
- ボランティアではなく、完全な営利事業とする
- 民間資金限定プロジェクトとし、行政の関与をまったく受けず、自由奔放に活動する
- 極力お金をかけない、人的ネットワークを最大限に集約することでコストを吸収する
- 人もモノもカネも東北内に限定せず、東京その他国内、海外の外部を拒まず、「外」と積極的に連携する
- 当新聞が、人的ネットワークの基点となり、つなぎ目の役割を担う
- 8面にプロジェクト企画の募集要領を掲載しました

# 「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」その⑧ 「大和朝廷と蝦夷攻防の多賀城」

## 蝦夷の頭領・伊治皆麻呂(コレハリノアザマロ)による多賀城制圧を思い起こしつつ、史跡・多賀城とアラハバキ神社、東北歴史博物館再訪

### 大雪で取材予定 大幅変更余儀なく

年末であわただしい十二月半ば、連載企画「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」のための二日間の取材を予定した。

一日目は、宮城・多賀城を訪ねる予定であった。古代信仰をいろいろ追跡していたところ、これまで謎の神のままに放置していたアラハバキの謎が解けそうだったので、以前訪問した多賀城のアラハバキ神社を再訪したいと強く思ったのだ。

それと、いつも素通りばかりしていて、じっくり訪問しなければならぬと思っていた史跡・多賀城もあらためて探索したかった。

これら二つの理由から、多賀城行きを決めた。

二日目は、宮城県を北上し、大崎市にある古墳時代の古墳群を探検し、その足で東に向かい、筆者の生まれ故郷である涌谷町の縄文貝塚、古墳時代の遺跡も回るという計画であった。灯台もと暗しのたとえ通り、筆者の故郷の周辺の古代遺跡の探索などかつては思いもつかなかったが、調べれば調べるほど、興味深い地域であることが分かって、まだまだ探索は続きそうである。

しかし後述のように、突然の吹雪で二日目の予定はすべてキャンセルとなってしまった。一日目の取材を終えていたので、かろうじて記事にまとめることができたのが幸いだった。

### 巨大な大和朝廷の 出先機関「多賀城」

史跡・多賀城に行つて見



多賀城の全体図



政庁復元模型



列柱復元



石敷き道路



陸奥総社宮

れば一目瞭然だが、とにかく広い。歩いて回るのは大変である。(写真参照)

現在は、建物跡、復元された列柱、礎石、石敷き道路などしか残っておらず、再建された建物がないので、その大きさをイメージするのがむずかしいが、巨大である。

この大和朝廷の出先機関には、政庁やその他行政施設を中心に、周辺には宗教施設などがあり、巨大な政府といった陣容である。また、ここには当時、多くの兵士もいたであろう。アテルイの時代には、都から数万人規模で攻めてきて、ここを拠点の一部としても活用したであろうから、それなりの規模は必要

だった。かつ奈良・平安初期にかけては、東北の蝦夷の勢力が脅威であり、それを圧倒するための施設である必要があったこともあるだろう。多賀城を境に、ここは永年、両陣営の勢力拮抗の場であったことは史実であり、多賀城から南は朝廷勢力が優り、北は蝦夷の勢力が優

### 伊治皆麻呂 想起

この多賀城に戦いを仕掛け、一時制圧したのが、アテルイに先立つ蝦夷のリーダー、伊治皆麻呂(これはりのあさまろ)である。アテルイに比べると知名度は低いし、矮小化されているが、ジワリジワリと侵

攻してきた大和朝廷に対し反旗を翻し、長期に亘る戦端の火ぶたを切ったのは皆麻呂であり、もつと大きく取り上げられてしかるべきである。

この多賀城遺跡を歩き回り、その大きさを体験すると、この拠点に戦いをしかけるといふことがどんなことなのか実感できる。

そして伊治皆麻呂というリーダーの大きさも勇気も納得できるし、そしてそうせざるを得なかった当時の朝廷対蝦夷の状況がかなり緊迫していたことも容易に想像できる。

ましてや、皆麻呂は、蝦夷とはいえず、国府に仕える身であり、官位も授かっていた。それなのに反旗を翻したのだ。余程の訳があったに違いない。

アラハバキ神社再訪

多賀城のアラハバキ神社は第3号(2012/8月号)でも取り上げた。そのときには、この神がどのような神であるかは謎と記載した。とはいえ、その後、ずっと引っかかっていた。昨年秋、日本の古代信仰に関するある書籍を読んだ



アラハバキ神社 鳥居



拝殿



男根

神さま、  
仏さまの復興展



**古代の神アラハバキ**  
筆者の尊敬する日本古代史研究科の故吉野裕子氏によれば、アラハバキ神は謎

いたところ、このアラハバキ神の由来について有力な根拠が示されている箇所に出くわした。ワクワクした。それでどうしても再訪したくなったという訳である。その発見により、アラハバキは、以前よりずっと身近に感じられた。無性に行きたくなった。

の神であることは確かだが、さぐる手がかりとしては、伊勢神宮内宮御敷地に祀られているハハキ神(波木神)があり、その神は土地の守護神という。また、これも由緒が判然としないうちにこのハハキ神とをつなぐものとしてアラハバキ神をおくと、これらの神々の本質も明らかになるのではないかと。そして、ハハキ神(波木神)↓頭(あら)波木神(内から外へ顕現したハ

ハハキ神)↓荒(あら)波木神↓荒神という関係が成り立つのではないかと推理する。傾聴に値する。



縄文美人

を再訪した。ちょうど、「神さま、仏さまの復興」という企画展があった。それと、最近夢中になっている東北の縄文に関する展示もあらためて見たかった。常設展示場を入ってすぐのところ、縄文時代の女性像がある。二度目の対面で、馴染みとなった像にまた出迎えてもらっているという感覚になった。シンプルな服装だが、おしやれであり、アクセサリーも身につけている。整った顔、楚々とした姿。嫌みのない女性。この像により、とても縄文時代を身近に感じることが出来る。今後はぜひ「ひいき」にしよう。

**東北歴史博物館再訪**

多賀城散策、アラハバキ神社参拝でもなお時間が残ったので、東北歴史博物館

**東北縄文の世界**

筆者はいま、縄文文化に惹かれている。いろいろ書籍研究はしているが、縄文

の遺物も並行して見たいなつた。東北歴史博物館には縄文に関する常設展示も豊富である。また、縄文時代に先行する新石器時代の二万年前は大陸とつながっていたの

か、縄文人がどのような食物を食べていたか、土偶にはどんな意味があるのかなど興味がない。日本人の精神の基層に縄文の心があると言われるが、現代とどういう接点があるかを追跡し、つながりを実感したいと常々思っている。そのためにはこはうってつけの場所である。

舞い始めた。すぐに一面の雪景色となった。それでも翌日になれば、雪も止み、溶けて、取材は大丈夫だろうと高をくくっていた。その日は、大崎市に宿泊したが、明け方、ものすごい風の音で目が覚めた。そして窓のカーテンを開けてみてびっくり。猛吹雪であった。取材はすぐあきらめた。車での移動を予定していたが、とても運転できる状況ではない。帰京の足も心配になってきた。幸い東北新幹線は通常通りの運転中止になるか分からない。とりあえず、帰ることに決め、すべての予定をキャンセル。遺跡は逃げない。近いうち再挑戦しよう

雪から吹雪へ  
取材一日目の夜から雪が



初日に降り始めた雪



一夜明けて雪景色



大崎市の高校生作-釜神さま



2万年前はほぼ大陸と地続き



2万年前の仙台近辺



縄文時代の食料-木の实

「釜神さま」とは、文献もなく起源も不明であり、分布地域もほぼ旧仙台藩領に限られている。「かまど」を大切にし、火の守り神、魔除けの神として、いかめしい面である。台所の「かまど」の上や土間の柱に祀られ信仰されてきたが、現代では「かまど」そのものが希少価値である。さらに驚いたのが、すべて地元の高校生の作品のようだ。こうした形で、地域の伝統が維持されていることに感激し、取材を終えた。

雪で早々に退散しよう東北新幹線・古川駅の改札口に入つてすぐのところ、何と「釜神(かまがみ)さまの集団」が並んでいた。「釜神さま」とは、文献もなく起源も不明であり、分布地域もほぼ旧仙台藩領に限られている。「かまど」を大切にし、火の守り神、魔除けの神として、いかめしい面である。台所の「かまど」の上や土間の柱に祀られ信仰されてきたが、現代では「かまど」そのものが希少価値である。さらに驚いたのが、すべて地元の高校生の作品のようだ。こうした形で、地域の伝統が維持されていることに感激し、取材を終えた。

# 藤沢町40年の歩みに見る 住民自治

## 地方の課題に先に 直面していた藤沢町

岩手県南部に藤沢町という町があった。今は合併して一関市の一部となっている。山あいの小さな町である。仙台から行くと、新幹線で一関まで三〇分前後、そこから藤沢町まではバスで約一時間掛かる。だから、一関市中心部に行ったことのある人は多くいても、そこから藤沢町まで足を伸ばした人はそれほど多くないだろう。もっとも、岩手サファリパーク、館ヶ森アーク牧場、キリシタン殉教公園といったスポットがあるので、それらを訪れた人はいるかもしれない。

しかし実は、藤沢町は知る人ぞ知る、住民自治のモデルケースの一つとしてよく取り上げられる町である。しかもその歴史は四〇年近くに及ぶ。おおよそ地方自治を本格化たらしめる

ための地方分権が本格的にクローズアップされたのは、一九九五年の地方分権推進法成立以降である。その四半世紀も前に、藤沢町では住民参加による自治が始まっていた。これは特筆すべきことである。

いったいどうしてそのようになれたのか。藤沢町は一九五五年に旧藤沢町と周辺の三つの村が合併して誕生した。当時の人口は一六〇〇〇人を超えていたが、その後急速に過疎化が進み、一九七一年には過疎地域の指定を受けた。一関市と合併する直前の人口は九〇〇〇人を割り込んでいた。現在、多くの地域で高齢化と人口減少が課題となっているが、藤沢町は既に四〇年も前に同様の現実を直面していた。そして、こ

の課題を解決するために始まったのが、住民自治の仕組みであったのである。私がこの藤沢町のことを知ったきっかけは、国民健康保険藤沢町民病院(現・一関市国民健康保険藤沢病院)の存在である。この病院は二〇一一年まで一七年連続黒字決算で、二〇〇八年には自治体立優良病院として総務大臣表彰も受けている。全国の多くの自治体立病院が慢性的な財政赤字に苦しむ中、山あいの五十四床の小さな自治体病院がなぜ一七年連続で黒字経営を成し得ているのか、ということに最初に興味を持った。

藤沢町には、県立病院が一九六八年に廃院して以来、病院がなかった。当時、住民の実に八割が町外の病院に搬送され、そこで最期を迎えるという現実があった。そこで藤沢町は病院建設計画を打ち出した。予想される経営困難を理由に県や国は計画に猛反対し、容易には実現しなかったが、町の努力が実り、県立病院廃院から四半世紀経った一九九三年に藤沢町民病院が誕生した。いざふたを開けてみたら、経営困難どころか黒字経営を続けて今に至っているのである。

そのことに大いに注目したのであったが、実際に藤沢病院の病院事業管理者で

院長の佐藤元美氏にお会いしてお話を聞いてみたら、黒字経営はあくまでも結果であって、その取り組みの内容こそが特筆すべきものだということがよく分かった。

過疎地域にあり、藤沢病院が町で唯一の病院であるという事情から、藤沢病院は保健・医療・福祉を一体化して提供する「地域包括ケア」に先進的に取り組んでいた。毎年夏に開催する、宿泊を伴う「地域医療セミナー」には全国各地から多くの医療関係者が集い、藤沢病院の先進的な取り組みを学んでいく。

様々な取り組みの中でもとりわけ目を引いたのが「地域ナイトスクール」と呼ばれる、病院職員と地域住民とが直接対話する場づくりである。病院職員はそこで地域住民の病院への意見や要望を聞く。一方、地域住民は病院職員が日々何を考えて医療に取り組んでいるかを知る。そうした相互理解を促進する場であると共に、地域住民の病院運営への参加の場ともなっている。黒字経営の要因は多くあるが、この「地域ナイトスクール」によって、絶えず地域住民のニーズを的確に把握し、それに応える医療を提供してきたこともその大きな要因の一つである。そしてまた、こうした「地域ナイトスクール」のような試みが地域住民に受け入れられる余地があった

## 町唯一の病院に見る 先進性

では、藤沢町ではどのような住民自治が行われているのだろうか。町内に四三ある行政区すべてに「自治会」を設立した。各自治会には役場から地域担当職員を派遣、自治会の住民と役員は地域懇談会を開催、住民から出された要望やアイデアを「ミニ地域開発計画」としてまとめた。各自治会の「ミニ地域開発計画」は全自治会が参加する藤沢町自治会協議会の場にもちより、議論して優先順位づけなどを行う。町は協議会から提出された案に基づいて総合開発計画を策定し、予算化する、といった仕組みである。

## 藤沢町の画期的な 住民自治

この仕組みの下では住民は、自分たちの要求だけを主張していればよいというわけにはいかない。同じように出された他地域の要望も見ながら、全町的に見てどの項目の優先順位が高いのかについての判断を迫られる。各自治会から出された計画に基づいて町の計画が策定されて予算も決まるとなれば、自分たちの声が行政に反映されるのと同じように、そこには相応の責任も生じる。

こうした仕組みを支えるための仕掛けもあった。最初に行ったことは「研修バス」を購入したことであったという。物見遊山の旅行ではない、住民と役員職員が他地域に出掛けて学習するためには使うバスである。そもそも住民と役員職員が同じバスに乗って視察に行くという形も珍しいが、それも共通の知識の上で議論をするという土台作りに役立った。また、町内では住民向けの研修会も活発に行われた。人材育成がこの仕組みの肝であったことが窺える。

話し合いの中では、どこまで行政が担い、どこまでを自治会が担うかという役割分担も議論された。就職

のために町を離れた若者を呼び戻すために企業誘致が図られた際には、企業を誘致する土地の確保が自治会に任せられ、自治会は候補地の地権者と交渉して用地を確保するという仕組みも生かされた。

こうして他の地域から見ると度肝を抜くような住民自治の仕組みはしかし、過疎化という已むに已まれぬ状況から生まれた。こうした住民自治の仕組みを強力なリーダーシップを以て推進した当時の町長、佐藤守氏は言う。

「過疎で怖いのは、人口の流出だけではない。むしろ、住民が地域への誇りや希望を失ってしまう『心の過疎』の方が怖い」

そうした中で地域再生の基礎をどこに置くかを考えた時に、それは「残った住民を基礎に置いて地域を再生していく以外にない」ということだったのである。

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っしてほしい」

旧町役場の前に、「希望のケルン」と名付けられた記念碑がある。一九九〇年に、当時の全住民と四三自治会が持ち寄った石を積み重ねて造られた四角錐型の碑である。「石」は「意志」に掛けられ、町づくりにさらに挑む全住民の意志を形にしている。この、町づくりに取り組む意志、特に同様の地域を多く抱える東北において、一つの範として見習いたいものである。

「希望のケルン」(「まちの総合情報誌ふじさわ」2011年5月号より)

べき事例だと強く思う。道州制下における基礎自治体の役割についてはいろいろと議論がされているところであるが、その大きな役割として道州制基本法案では、「住民に身近な地方公共団体として、従来の都道府県及び市町村の権限をおおむね併せ持ち、住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践できる地域完結性を有する主体」とある。ここで「住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践できる地域完結性を有する主体」とあるが、「住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践」するためには、住民のニーズを把握し、それに基づいた施策を講じることが不可欠である。そのためには、住民のニーズをすくい上げることでできる仕組みが必要となるが、藤沢町で

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っしてほしい」

旧町役場の前に、「希望のケルン」と名付けられた記念碑がある。一九九〇年に、当時の全住民と四三自治会が持ち寄った石を積み重ねて造られた四角錐型の碑である。「石」は「意志」に掛けられ、町づくりにさらに挑む全住民の意志を形にしている。この、町づくりに取り組む意志、特に同様の地域を多く抱える東北において、一つの範として見習いたいものである。

## 執筆者紹介

大友浩平

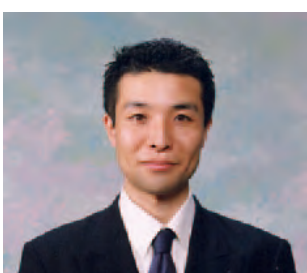
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



の課題を解決するために始まったのが、住民自治の仕組みであったのである。

院長の佐藤元美氏にお会いしてお話を聞いてみたら、黒字経営はあくまでも結果であって、その取り組みの内容こそが特筆すべきものだということがよく分かった。

では、藤沢町ではどのような住民自治が行われているのだろうか。町内に四三ある行政区すべてに「自治会」を設立した。各自治会には役場から地域担当職員を派遣、自治会の住民と役員は地域懇談会を開催、住民から出された要望やアイデアを「ミニ地域開発計画」としてまとめた。各自治会の「ミニ地域開発計画」は全自治会が参加する藤沢町自治会協議会の場にもちより、議論して優先順位づけなどを行う。町は協議会から提出された案に基づいて総合開発計画を策定し、予算化する、といった仕組みである。

この仕組みの下では住民は、自分たちの要求だけを主張していればよいというわけにはいかない。同じように出された他地域の要望も見ながら、全町的に見てどの項目の優先順位が高いのかについての判断を迫られる。各自治会から出された計画に基づいて町の計画が策定されて予算も決まるとなれば、自分たちの声が行政に反映されるのと同じように、そこには相応の責任も生じる。

こうした仕組みを支えるための仕掛けもあった。最初に行ったことは「研修バス」を購入したことであったという。物見遊山の旅行ではない、住民と役員職員が他地域に出掛けて学習するためには使うバスである。そもそも住民と役員職員が同じバスに乗って視察に行くという形も珍しいが、それも共通の知識の上で議論をするという土台作りに役立った。また、町内では住民向けの研修会も活発に行われた。人材育成がこの仕組みの肝であったことが窺える。

話し合いの中では、どこまで行政が担い、どこまでを自治会が担うかという役割分担も議論された。就職

のために町を離れた若者を呼び戻すために企業誘致が図られた際には、企業を誘致する土地の確保が自治会に任せられ、自治会は候補地の地権者と交渉して用地を確保するという仕組みも生かされた。

こうして他の地域から見ると度肝を抜くような住民自治の仕組みはしかし、過疎化という已むに已まれぬ状況から生まれた。こうした住民自治の仕組みを強力なリーダーシップを以て推進した当時の町長、佐藤守氏は言う。

「過疎で怖いのは、人口の流出だけではない。むしろ、住民が地域への誇りや希望を失ってしまう『心の過疎』の方が怖い」

そうした中で地域再生の基礎をどこに置くかを考えた時に、それは「残った住民を基礎に置いて地域を再生していく以外にない」ということだったのである。

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っほしい」

旧町役場の前に、「希望のケルン」と名付けられた記念碑がある。一九九〇年に、当時の全住民と四三自治会が持ち寄った石を積み重ねて造られた四角錐型の碑である。「石」は「意志」に掛けられ、町づくりにさらに挑む全住民の意志を形にしている。この、町づくりに取り組む意志、特に同様の地域を多く抱える東北において、一つの範として見習いたいものである。

藤沢町の地域包括ケアの拠点藤沢病院



話し合いの中では、どこまで行政が担い、どこまでを自治会が担うかという役割分担も議論された。就職

## 藤沢町方式を 一つのお手本に

藤沢町での住民自治の取り組みは、今この時期、地域にとって大いに参考にす

べき事例だと強く思う。道州制下における基礎自治体の役割についてはいろいろと議論がされているところであるが、その大きな役割として道州制基本法案では、「住民に身近な地方公共団体として、従来の都道府県及び市町村の権限をおおむね併せ持ち、住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践できる地域完結性を有する主体」とある。ここで「住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践できる地域完結性を有する主体」とあるが、「住民に直接関わる事務について自ら考え、自ら実践」するためには、住民のニーズを把握し、それに基づいた施策を講じることが不可欠である。そのためには、住民のニーズをすくい上げることでできる仕組みが必要となるが、藤沢町で

「我々は受益者にはなれない。作った人が受益者になるというのはなかなかないものだ。今、我々は一〇〇年前に作ったもので生かされているのだ。今やっている我々も一〇〇年後の住民に対する負託者となる。そう思っほしい」

旧町役場の前に、「希望のケルン」と名付けられた記念碑がある。一九九〇年に、当時の全住民と四三自治会が持ち寄った石を積み重ねて造られた四角錐型の碑である。「石」は「意志」に掛けられ、町づくりにさらに挑む全住民の意志を形にしている。この、町づくりに取り組む意志、特に同様の地域を多く抱える東北において、一つの範として見習いたいものである。

連載  
むかしばなし



第八話  
これが、さあかす

「あれは三年前、大正から昭和になった年の冬の事でした。私は東京へ向かう汽車に乗ったのでしたが」

北山丘陵を目前にして、宮澤賢治は佐々木喜善に語っている。

「その時は、仙臺さ立ち寄る予定はありませんでした。夜汽車でしたから、席で眠りかけたのですが、気がつくといは芭蕉の辻の真ん中に横たわっていたのです。」

あまりに唐突な話の展開に、喜善は呆気にとられた。「しかも、十字路の四方に



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

立派な瓦屋根がついている。以前写真で見たことのある、江戸から明治の頃の芭蕉の辻とわかりました。」

「何ですと・・・では賢治さんは、その時過去の時代へ跳んだというのですか。」

「幸い、その時刻は夜明け前で、行き交う人は疎らでしたが、鬚を結った確かに前時代の姿でした。その十字路に立っていた虚無僧殿が、私に近づいてこられた。それが芭蕉さんでした。」

喜善、言葉が出ない。すると、一番前を行く当の怪僧が、振り向き口を開くのだった。

「そう。拙僧は三年もの間、お待ちしていたのですよ。宮澤殿が、あの場所に出現なさるのを。」

その時だ。突然澄んだ女の声が、樹の上から聞こえてきた。「ぬしら、何用でここを通るか。」

櫛の樹の上から、小柄な女が素早く降りてくる。全身を黒い衣に包んでいて、顔も眼だけが覗いていた。衣は黒地に黄色の刺繍が渦巻状で複雑に縫いこまれて

いる。気づくと独りだけではない、同じような装束の人影が次々に現れ、一行を

とどめ込んでいた。全員で十人程らしく、背丈も皆同じ五尺程だが、一人だけやけに背が高い。よく見ると、腕が短いのに脚が異常に長い女が、逆に脚が短いのに腕が異常に長い女を背負っているのだと判り、男たちはぎよつと飛び退いた。

「ここは我が主の治める森。侵す事まかりならぬ。」

喜善と賢治の視線が合えば、まるで目で会話しているように二人の目玉がくるくる動く、他の女と違って黒布で目を隠して口の方を覗かせている女がそれに気づいたように顔を向ける。

「明日辺り、この地を大軍が蹂躪致すのですが、動かぬのでござるか。」

芭蕉が女の一人に尋ねると、その女は返事をせず、別の娘が横から答えた。「恐るるに足らぬ。来るなら来るがいい。」

先程とは別の娘だが、声がかく同じに聞こえる。そういえば、目元も皆同じに見えるのだった。

「威勢いい娘共だごとな。一人くれえうちのサーカスさ欲しいもんだ。」

女達より少し背丈がある位の、豊饒とした洋服の老人が笑う。壇憲家という名の、サーカスの芸人らしく、一閃へ里帰りしてきて、仙臺の博覧会へ戻るところだったという。女達が急にそわそわし始めた。互い違いに目を合わせ、さあかす？さあかす？

と口々に呟いている。と思うと、目を黒布で覆った娘が何か感じ入ったように言う。

「こんなもの、見た事がない・・・」

すると次に、他の娘らが一斉に身体をびくりと震わせて、各々あらぬ方向に視線を向けながらまた口々に「すごい」「何だこれは」「これが、さあかす・・・」と囁き合うのだった。

「こ、これは一体？」

今純三が愕然としていて、あなた、私共の心の中を見ましたね。」

宮澤賢治が冷静に、目を覆った娘に言った。「つまり私共の思い浮かべたサーカスの様子を、お仲間とも共有なさった。」

娘のむき出しの口元が、微かな笑みを浮かべる。「そう。お前達はこの山に石を置きにきたのだな。この山の主は、我らの主である。ついて来るがいい。」

女達の包囲に圧迫感がある。一行は、有無を言わず山中へ導かれていた。「喜善さん、どう思われますか。」

## 『八重の桜』と、えみし考

二〇一三年度NHK大河ドラマ『八重の桜』が終了して、新年が明けた。原子力発電所未曾有の事故による終わりなき苦難の中の「福島」を元気づけよう、と企画されたとかされないとか。もしそうだとしたらある意味予定外に飛び出た企画であり、失敗する可能性は低くなかったかも知れないのだが、そこは優れた

たが、その時大寺太能が、一人足りないぞ、と声を上げた。見渡すと確かに、一行が七人に減っている。水沢の若き銀行員、守隅全克の姿がないのだった。

男達がざわついた次の瞬間、突然立ち止まった娘達が、一斉に腰の刀を抜いた。

「皆、ここで死んでもらわねばならぬ。」

賢治が歩きながらこっそり尋ね、喜善応えて云わく、「先程、質問に答えない娘がいましたか、おそらく彼女らのある者は目が見えず、ある者は耳が聞こえず、ある者は口がきけないのです。」

「どういう事でしょうか。」

今純三が横から入ってきた

スタッフに技術、実話としての素材の良き、そして決して偽物ではない志という条件が揃ったのか、結果は予想以上の成功となったのではないだろうか、と思われる。確かに最も重要なドラマの骨子として、東北人の強さ、優しさを伝え、歴史的真相に迫ろうという表現者としての使命感を鼓舞する重厚なテーマがあつて、かつて「中央の」放送局がここまで東北側の視点で描写してくれた事があつたかという驚きと感動を覚える事も少なくなかった。

しかし一方で、「逆賊の汚名を晴らす」という物語のキーワードとも言える一文に象徴される、このドラマ上、そして歴史上也会津人、東北人を縛りつけた強固な概念に対し、複雑な違和感も禁じ得なかった。確かに、会津東北はあの時、

「天皇」に反旗を翻した訳ではなく、寧ろ全く逆であった。濡れ衣を着せられたからには、名譽は回復されなくてはならない。反面、この論理には根底から強烈な矛盾が秘められている。

即ち、東北人はもともと天皇の治める国とは別の世界の住人だった。つまり、天皇に従わない事自体は逆賊でも何でも無い。元より、天皇は東北人にとって君主ではないのだから。

このように書きだすと、過激として反発を覚える読者もおられるかも知れない

が、ここでひとつ例をあげると、かつてNHK大河ドラマにも採用された岩手県出身・在住の作家、高橋克彦氏による小説『炎立つ』が、既に同様の主張を含んでおり十分に過激であった。ここで平泉藤原氏は自らの治める奥羽の国の理想として、「内裏(朝廷)とは無縁の国」「蝦夷が蝦夷のまま生きていける国」と定義しているのだ。

実はそれより七百年後の東北で結ばれた奥羽越後列藩同盟には、北方政権樹立という主旨があり、その際薩長の掲げる天皇とは別の独自の天皇が、同家系から擁立された。これもまた、逆賊というレッテルへの拒絶反応が生み出した結果と思われるが、本来、東北の独立に「天皇」は不要のはずなのである。

岡本公樹『東北不屈の歴史をひもとく』に、「(藤原清衡の第一の目的は、中央勢力の介入を二度とさせない事にあつた。」とある。建前上、朝廷の臣下を名乗り従つたのは和平状態を保つ為であり、そこに見えるのは「大和との分離」への切望に他ならないのだ。

そもそも「蝦夷」とは、天皇に従わぬ者である、という歴史的前提がある。実際の「蝦夷」が中央より勝手に作られた概念だったとしても、遠くスコットランドにおいて元々ゲール人ピクト人、ブリトン人などが混在したままとまりのなか

った地域が、十三世紀イングラントからの侵略によって一つの国・民族の概念を獲得していったように、東北人もまた強大な天皇国家に反発しそれは異なる民族という意識を共有していた可能性を支持してみた。高橋克彦氏の物語世界の底流には、この独立の民族としての「蝦夷」概念が常に潜在しているのだ。

「天皇否定」は「実は誰よりも勤王であつた」会津を描く『八重の桜』を否定するだろうか？また、先の大震災の後、高齢を押しつけて被災地の仮設住宅を訪問し続けた現天皇を否定するだろうか？両方に共通するのは、東北人が対面し敬愛した天皇とは、あくまで「個人」であつたという事である。しかし天皇とは時の権力が掲げて政治利用する、

「あるようで実はない存在」「個人であつて個人ではない存在」である事を、忘れてはならないだろう。かつての全体主義的な国家の再生を目論むと言われる現安倍政権は、日本人が天皇を頂点として敬うのは当然と主張するが、よく知られているように特に沖縄県においては、それは決して当然の事ではない。現地

の歌壇に、こんな歌がある。ニッポンは母国にあらず島人の心に流す血を見つむのみ

長い年月を以ってしても、日本はそのアイデンティティを奪う事に成功しなかったのだ。では、東北はどうなのだろうか。東北は中央に近く、交流の歴史も長いため、完全に同化した人とは言いが、同化したならば中央政府は沖縄の人々の怒りを買うような差別的政策を、東北に対しては行っていないという事だろうか。ならば何故、この時代に高橋克彦氏や、次の世代の私のように、東北の独立を問う人間が存在するのだろうか。八百年前に平泉藤原氏が持っていたであろう、「内裏の治める国とは別の国」という意識、思想は今では無意味なものなのだろうか。読者、全ての日本人に問いたい事は尽きないが、ここでは一旦、本稿のテーマに最も沿つた一つの問いで締めよう。

『八重の桜』で東北人が受け取るべきメッセージとは何か。君主となれば是非でも忠義を貫く、徹底的な愚直さと誠実さが東北にはある。だが、二度と利用されてはならない。このドラマは一方で、一人一人が自分の頭で考え、信念を固めたならばいかなる強大な権力にも抗う東北人の姿をも活写した。それこそがまさに「蝦夷」本来の姿であり、今に至っても「中央」が奪えない、東北の地の育む精神である、と私は信じたい。

「次回予告」

結局、この娘らはサーカスをやってみたくはないのか？なかなか話が進みませんが今年も宜しく。

「次回予告」

# シリーズ 遠野の自然 「遠野の冬」 遠野 1000 景より



遠野郷八幡宮

ここ三回は、遠野の祭りを取り上げてきたが、今回からまた「遠野の自然」に戻ることにする。

◇ 遠野の秋も良いが、冬もまた冬の楽しみがあつてとても良いと聞いている。しかし、岩手県のなかでも遠野の冬の寒さは特に厳しいと聞かされると、東北出身でありながらもすこぶる寒



## 初日の出

がりの筆者は二の足を踏んでしまう。ある知人などは、一番寒いときはマイナス二〇度にもなると脅かすが、遠野在住の方に最近の気温を聞けば、まだマイナス一〇度にもなっていないというから、いまのところは極寒というほどでもないようだ。

年明けの一月一日以降には、不定期開催で三月ははじめまで、「遠野どべつこ祭り」という祭りがあるという。ここでは、郷土芸能あり、カッパおじさんトークショーあり、昔話などが聞けるようだ。冬には冬の楽しみ方があるのだろう。

◇ 遠野の秋も良いが、冬もまた冬の楽しみがあつてとても良いと聞いている。しかし、岩手県のなかでも遠野の冬の寒さは特に厳しいと聞かされると、東北出身でありながらもすこぶる寒



西日を浴びる六角牛山

放題」もあるというので、お酒好きの筆者の心も大いに揺れる。特にこの「どべつこ」というのは賞味してみたものだ。お酒をいただければ寒さなんかどこかへ行ってしまうのだから、寒さなんて最初だけと、寒がりの自分を忘れそうになる。

◇ 遠野郷八幡宮は昨年秋におじやました。その八幡宮が、すっかり雪景色である。雪かきをする側の方々は大変だろうが、見ているだけならとても美しい。

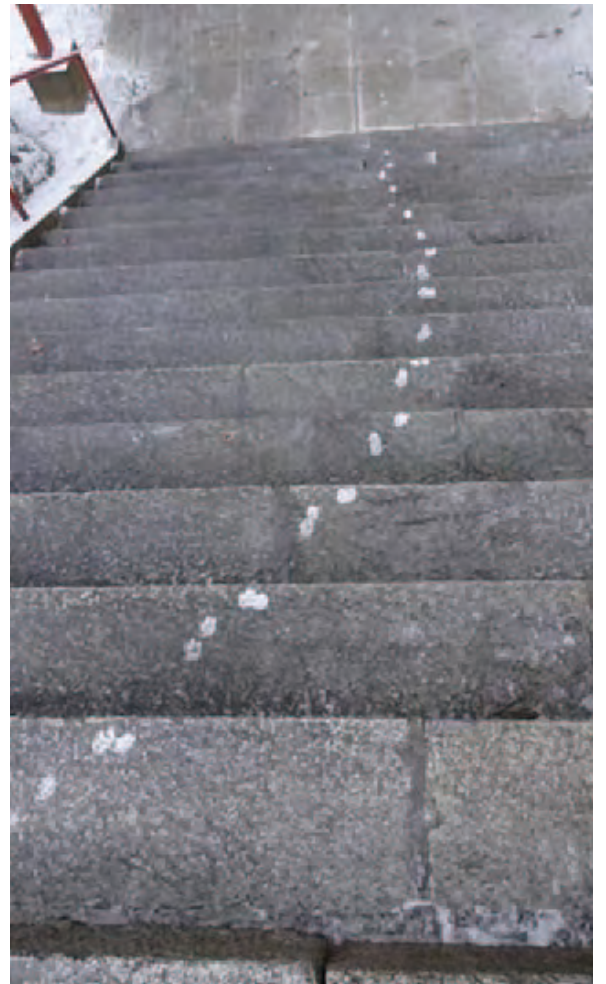
◇ 遠野の秋も良いが、冬もまた冬の楽しみがあつてとても良いと聞いている。しかし、岩手県のなかでも遠野の冬の寒さは特に厳しいと聞かされると、東北出身でありながらもすこぶる寒



寒い朝の窓

◇ やっぱり遠野は寒いのだ。窓に氷の結晶が貼りついている。この現象はマイナス五度以下でないと見られないようだ。

◇ 正月なので、やはり初日の出が登場しないと落ち着かない。近くの山頂から初日の出が出現する。気持ちも改まる。こうした風景も遠野ならではのものです。その同じ朝日が、手水鉢



猫参拝の足跡

◇ 空一面に広がった雲に反射し、一大パノラマとなっている。神々しさを感じる。冬とはいえ、遠野には珍しい動物もいる。ゴイサギである。とても敏感な鳥で、少しでも気配を感じると逃げてしまうという。まさにその貴重な瞬間を捉えた画像である。



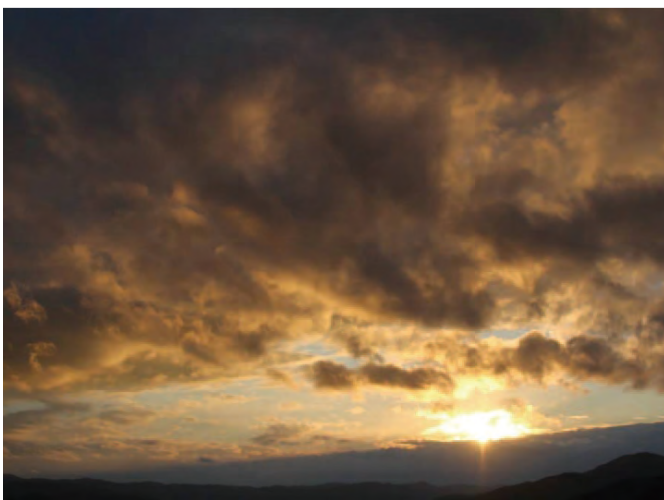
手水鉢に朝日

◇ 遠野の冬は、他の季節と異なる、色鮮やかとはいえない。白が基調となる。しかし、そのなかにあつても、さまざまに印象深い情景を見せてくれる。モノトーン、あるいは薄い色彩のなかで、自然は息づいている。春の復活を待っているのだ。

◇ 遠野の冬は味わい深い。行きたい、でも寒い。筆者の逡巡は続く。



飛び立つゴイサギ



高清水からの落陽

# 東北地ビール紀行 その⑤ 宮城県編

## 宮城県の 地ビール事情

宮城県と言えば周知のよ  
うに、東北で唯一人口百万  
人の大都市仙台市を擁する  
県である。その宮城県は東  
北では岩手県に次ぐ四つの  
地ビール醸造所がある。惜  
しむらくは、東北では突出  
した人口規模を持つその仙  
台市に地ビール醸造所がな  
いことである。二つの地ビ  
ール醸造所を有する盛岡市  
を始め、東北の県庁所在地  
では秋田市と福島市に地ビ  
ール醸造所があり、それぞ  
れしっかりと地域に根付い  
ていることや、年二回市内  
で開催されているオクトー



仙南シンケンファクトリーは  
ドイツ風の建物である

バーフェストがかなりの盛  
り上がりを見せていること  
を鑑みても、仙台に地ビ  
ール醸造所があればきっと相  
応に受け入れられていたに  
違いない。しかし、仙台市  
以外に拠点を置く四つの醸  
造所はそれぞれしっかりと地  
域に根付いている。

### J Aが運営する 地産地消の地ビール

まず宮城県南部、角田市  
にある「仙南クラフトビ  
ール」から。阿武隈急行の角  
田駅に程近い場所に、J A  
宮城仙南が運営する、ドイ  
ツのロマンチック街道に  
ある建物をイメージして  
建てられた仙南シンケン

ファクトリー(角田市角  
田字流 1974、TEL0224-  
61-1150、http://www.  
ja-miyagisennan.jp/  
ehou/1417.html)がある。

仙南クラフトビールは、  
この仙南シンケンファクト  
リーの中にある醸造所で造  
られている。ピルスナー、  
ヴァイツェン、ミュンヘン  
ラガー(ピルスナーより麦  
芽風味が強い)、さらにア  
ルコル度数が高めのスタ  
ウト、それに地元で取れた  
古代米を副原料に使った古  
代米エールがある。角田産  
の大麦を使ったビールも期  
間限定で醸造される。

ハムやソーセージも自家  
製である他、J Aが運営し  
ているだけあって料理に使  
われる食材も仙南地域のも  
のがメインで、地産地消を  
意識したメニューとなっ  
ている。  
唯一残念なのは、この仙

南シンケンファクトリー、  
ビアガーデンが開設される  
夏の週末を除いて基本的  
に昼のみの営業で、夜は四  
名以上で予約しないと営業  
しないということである。  
もともと、ビール好きを集  
めて阿武隈急行で飲みに行  
ってみるのもいいかもしれ  
ない。

### 山中の松島?

宮城県の中部、大郷町に  
は「松島ビール」がある。  
松島の海岸沿いではなく、  
そこからずっと内陸の愛宕  
山という山の麓に、夢実の  
国(黒川郡大郷町東成田  
新田1-1、TEL022-359-  
5555、http://www.tinet-  
ne.jp/yumeni/)と3日  
帰り温泉施設がある。「松  
島ビール」はその中にある  
醸造所で造られている。運  
営しているのは、サブリー  
メント製造で知られるサンケ  
ーヘルズで、経営の多角化  
の一環で地ビール醸造を始  
めたそうである。  
温泉は、四段になった露  
天風呂が特徴で、湯上りに  
出来たての地ビールが味わ  
えるのがいい。ヘレス(ピ  
ルスナータイプだがよりま  
るやか)、バイツェン、デ  
ュンケル(濃色のビール)、  
ボック(アルコル度数が高  
めのビール)の四種があ  
り、いずれも館内のレスト  
ランで味わえる。特徴的な  
のはボックで、通常のボッ  
クと違うヴァイツェン系の  
ボックである。  
宮城県内では「伊達政宗

麦酒」(ヴァイツェン)、「支  
倉常長麦酒」(ピルスナー)、  
「片倉小十郎麦酒」(ケルシ  
ユ)という地ビールが売ら  
れている。戦国武将ブーム  
もあって相応の売れ行き  
ようだが、これらのビールの  
醸造も、現在は「松島ビ  
ール」が引き継いでいる。

### 「加美富士」の 麓の地ビール

宮城県の北西部、加美町  
には「やくらいビール」が  
ある。ここに薬菜山(やく  
らいさん)という山があり、  
その山容から「加美富士」  
とも呼ばれる。その麓にや  
くらいリゾート(加美郡加  
美町味ヶ袋薬菜原1-81、  
TEL0229-67-5211、  
http://www.town.kami-  
miyagi.jp/yakurai-  
shinkou/index.html)とこ  
う、日帰り温泉や宿泊施設、  
レストラン、プール、パー  
クゴルフ場などが併設され  
た複合施設があるが、この  
中のレストランぶな林内に  
「やくらいビール」の醸造  
所がある。  
運営しているのは第三セ  
クターの薬業振興公社で、  
このレストランも手作り  
ソーセージや地元産の食材  
を使った料理など、地産地  
消のメニューが揃う。ビ  
ールは、ピルスナー、ヴァ  
イツェン、デュンケルの三  
種である。  
ちなみに、やくらいビ  
ールのあるレストランぶな林  
と、日帰り温泉施設やくら  
い薬師の湯は隣接している

ので、夢実の国同様、やは  
り湯上がりに出来たて地ビ  
ールを楽しむことができ  
る。これも夢実の国も、車  
でないと行きにくいのが悩  
ましいところではあるのだ  
が。  
地ビールならぬ  
「地発泡酒」

宮城県の北部にある大崎  
市鳴子温泉にある鳴子温泉  
郷は県内屈指の温泉地だ  
が、そこからさらに国道  
108号線で秋田方面に向  
かうと鬼首(おにこうべ)  
高原がある。地熱発電所や  
間歇泉で知られるが、そ  
にリゾートパークオニコウ  
ベ(大崎市鳴子温泉鬼首  
字小向原9-55、TEL0229-  
86-2111、http://www.  
onkobecom)とこう、  
スキー場やホテル、キャン  
プ場、日帰り温泉施設、レ  
스토랑からなるリゾート  
施設がある。  
このレストラン鳴子の  
風には、地ビールならぬ地  
発泡酒「鳴子の風」があ  
る。地ビールと銘打たない  
のは、酒類製造免許の関係  
である。酒類製造免許では  
法定製造数量という年間の  
製造数量の最低ラインが決  
められている。このうちビ  
ールは60kLだが、60kL  
と言えは35mL缶にして実  
に17万缶超という数量であ  
る。これだけのビールを売  
りさばくというのは大変な  
ことである。一方、発泡酒  
ではこの法定製造数量は6  
kLとビールの10分の1で

ある。「鳴子の風」はこの  
発泡酒の製造免許に基づい  
て醸造されているので、厳  
密には地ビールではないの  
である。  
とは言え、山ぶどうや地  
元米「ゆきむすび」など、  
地元の素材をふんだんに使  
った発泡酒は、まさに「地  
発泡酒」である。定番は「高  
原ラガー」と、この「山ぶ  
どう」「ゆきむすび」だが、  
これら以外にパイナップル  
を使った発泡酒など、季節  
限定のビールが登場する。  
ここにも日帰り温泉施設  
すば鬼首があり、湯上がり  
に「地発泡酒」が楽しめる  
ものうちのいくつかを飲  
める店はある。まず、Re-  
staurant waon  
(レストラン・ワオン、  
仙台市青葉区一番町1-18  
青葉パークビルB1、  
TEL022-395-7496、  
http://waon-sendai.com/)   
では「やへらびビール」三

種が樽生で飲める。和醸良  
酒〇たけ(まるたけ)(仙  
台市青葉区大町2-11、  
TEL022-266-5541、  
http://sake-marutake.  
com)とsk7(サカナ)  
Bistro & Bar(仙  
台市宮城野区榴岡1-2-37  
ダイワロイネットホテル  
1F、TEL022-292-5088、  
http://www.sk7.jp)では  
「伊達政宗麦酒」が樽生で  
飲める。また、ダイニング  
Pab Gasthof MA  
RIA(ガストホフ・マ  
リア)(仙台市太白区西多  
賀4-1-1、TEL022-24-  
4619)では「松島ビール」  
三種が樽生で飲める。  
他に、瓶で飲める店もあ  
るが、詳細は拙ブログ  
(http://blog.livedoor.jp/  
anagmas/archives/5169  
8920.html)を参照した  
だければ幸いである。



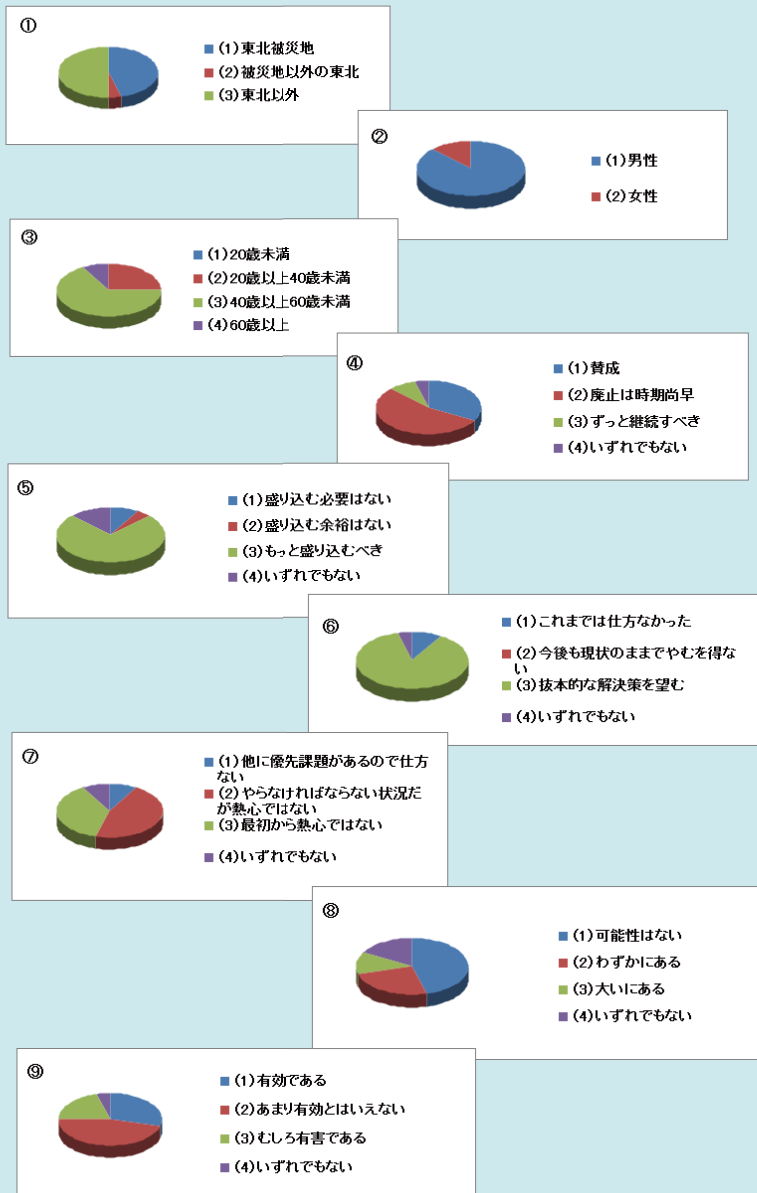
夢実の国では地ビールと温泉が楽しめる

### 仙台市内で 宮城の地ビールを 飲めるところ

これまで見てきたよう  
に、宮城県内の地ビール、  
地産地消を意識した作り  
や、温泉に併設された施設  
が多いところに特徴がある  
と言えそうである。それぞ  
れの場所を訪れた時にゆっ  
くり楽しみたいところであ  
る。  
先述のように、仙台市に  
は残念ながら地ビールはな  
いが、今まで紹介してきた  
ものうちのいくつかを飲  
める店はある。まず、Re-  
staurant waon  
(レストラン・ワオン、  
仙台市青葉区一番町1-18  
青葉パークビルB1、  
TEL022-395-7496、  
http://waon-sendai.com/)   
では「やへらびビール」三

## 第19号 ネットアンケート集計結果 アベノミクスと東北復興

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	11
	(2) 被災地以外の東北	1
	(3) 東北以外	12
②	性別	
	(1) 男性	21
	(2) 女性	3
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	6
	(3) 40歳以上60歳未満	16
	(4) 60歳以上	2
④	復興特別法人税前倒し廃止について	
	(1) 賛成	8
	(2) 廃止は時期尚早	13
	(3) ずっと継続すべき	2
	(4) いずれでもない	1
⑤	景気浮揚策に東北復興事業を盛り込むべきか	
	(1) 盛り込む必要はない	2
	(2) 盛り込む余裕はない	1
	(3) もっと盛り込むべき	18
	(4) いずれでもない	3
⑥	東北復興事業と復興事業雇用政策	
	(1) これまでは仕方なかった	2
	(2) 今後も現状のままでやむを得ない	0
	(3) 抜本的な解決策を望む	21
	(4) いずれでもない	1
⑦	アベノミクスは東北復興に熱心か	
	(1) 他に優先課題があるので仕方ない	2
	(2) やらなければならない状況だが熱心ではない	11
	(3) 最初から熱心ではない	9
	(4) いずれでもない	2
⑧	アベノミクスで東北復興事業が中心課題になるか	
	(1) 可能性はない	11
	(2) わずかにある	6
	(3) 大いにある	3
	(4) いずれでもない	4
⑨	アベノミクスは東北復興に有効か	
	(1) 有効である	7
	(2) あまり有効とはいえない	11
	(3) むしろ有害である	5
	(4) いずれでもない	1



今回のテーマは「アベノミクスと東北復興」。

政権発足から約一年経過し、東北復興に対する姿勢も大分明らかになってきたので、アベノミクスが東北復興にどのように影響を与えるかについてお聞きしました。回答者数24名。

まず、今回の特徴は、被災地の方のご回答が11名と高かったことです。

「復興特別法人税前倒し廃止」は、「廃止は時期尚早」が約54・2%、「賛成」が約33・3%と割れました。「景気浮揚策に東北復興事業を盛り込むべきか」は、「もっと盛り込むべき」が圧倒的で75%。復興が進まないのは人出不足という声もあつての質問、「東北復興事業と復興事業雇用政策」については、「抜本的な解決策を望む」が圧倒的で87・5%。「アベノミクスは東北復興に熱心か」は、「やらなければならない状況だが熱心ではない」が約45・8%、「最初から熱心ではない」が37・5%、合わせて「熱心でない」は約83・3%。「アベノミクスで東北復興事業が中心課題になるか」は「可能性はない」が約45・8%、「わずかにある」が25%。「アベノミクスは東北復興に有効か」は、「あまり有効とはいえない」が約45・8%、「有効である」が約29・2%、「むしろ有害である」が約20・8%と意見が割れました。

### 編集後記

今回の「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」の宮城取材での吹雪にはほんとにまいった。

事前に天気予報はチェックしており、雪予報はなかったので安心していましたが、予報はあてにならないことを思い知った。

朝方、ものすごい風の音で目が覚め、カーテンを開けて、ほんとに驚いた。

猛烈な吹雪。いったい何が起きたのか、寝ぼけ頭ではなかなか整理がつかない。幸い、すぐに吹雪は止んだが、一方、被災地はまだ大変だろうなと思った。

冬に雪はつきものだし、たかが一〇センチとか一五センチの雪では大騒ぎする方がおかしいかもしれないが、この雪で輸送は確実にストップするはずで、それは遅れている復興作業に支障をもたらすのも事実だ。

最近、復興に関するニュースもめっきり減ったが、もっと報道して欲しい。そうすれば、まだみんなが3・11を忘れていないというメッセージにもなる。

今年三月でちょうど三年目を迎える。もうすぐだ。当新聞でも何度も指摘しているが、この三年目というのが、復興が進展するかどうかの分水嶺でもある。忘れられないという掛け声だけでなく、現実に復興推進に貢献できる活動に尽力していきたいと思う。

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ ✕切はとくに設けません

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先
- (郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブロイド新聞【東北復興】宛
- (メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています